

2022. 2. 6. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書7章24～30節
『まだ見ぬ出来事の確認』

マルコ福音書7章では、それまでユダヤ教社会で「常識」と思われていた事がこくごとくひっくり返されて行く記事が並べられてゆきます。

1～23節ではユダヤ教の食物規定の廃棄が謳われます。旧約の昔から悪い食べ物が人をダメにすると考えられていました。しかし、ここではまるっきり反対に「人の心」から悪い思いが出てくる(21節)と述べられます。

本日の箇所「シリア・フェニキアの女の信仰」も同じように、当時の常識を覆す出来事が記されます。

舞台となりますティルスとは地中海沿岸にある歴史あるフェニキアの都市です。古来から海洋民族としてパレスティナの覇権をイスラエルと争った経歴も持ちます。人種的にもユダヤ人とは異なりました。シリア・フェニキア人はギリシヤ語を使い、文化的にもギリシヤ的な生活をしていました。しかし、そんなことより24節で「ティルスの地方」と明言されるのは、ユダヤから見て「異邦人の地」という蔑んだ意味の宣言だったのです。

いつも出来事は突発的に始まります。地元の女性が、どこで噂を聞きつけたのかイエスのもとにひれ伏して娘の癒しを嘆願します。「悪霊を追い出して下さい」というのは、病気を治して下さいという慣用句です。

それに対してイエスの言葉は冷やかに響きます。「まず子供たちに」、そして追い打ちをかけるかのように「子犬にやってはいけない」と。「子供たち」というのはユダヤ人のことですし、「子犬」というのは異邦人への蔑称です。なぜ、こんな言葉が語られたのでしょうか。

実は、ここで描き出されるのは5章1～20節の「悪霊に取りつかれたゲラサの人」の記事と同じ「初代教会と異邦の人の出会い物語」なのです。

ユダヤ教というのは周辺の他民族に対して自分たちは神に選ばれた民という自負がありました。これが異邦人伝道の妨げであり、初代教会の直面する問題だったのです。

おそらく異邦の地に渡った初代教会は24節にあるように家に籠もっていたのでしょ。自意識過剰で異邦の人々と関われなかったのです。その壁を異邦の人々の側から叩き破られたという経験なのかと思ひます。そして、この女性に熱意を込めて訴えます。「子供のパン屑はいただきます」と・・・。

マルコはここで先入観や偏見でしか異邦の人々を見れない「自分たち」を告発するのです。常識を覆して、異邦人が悪いのではなく自分たちが悪いという現実の捉え直しを宣言するのです。ここに福音があるという宣言です。

イエスの福音を受肉しようとした初代教会に集う人々は、このように異邦の人々の信仰を予期して異邦人伝道へと踏み出して行きました。そこには「もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。キリスト・イエスにあって一つだからである。」(ガラテヤ 3:28)とパウロも語ります。

わたしたちは、これまで自分の人生を支えてきた信念や経験、知識や力を持っています。しかし、そういったものに疑問を感じ、足許が揺らぐ思い無くして、神を信じるなどということは起こりえないのです。神を信じるとは、これまで既に見てきた出来事の上におっかぶせることではありません。そこに留まっていでは見えない「まだ見ぬ出来事の確認」なのです。